

## 天春、桜正の思い出

天春（てんしゅん）、桜正（さくらまさ）とは兄雄一郎が愛した馬の名前である。桜正は兄が終戦の年、昭和二十年九月仙台の憲兵隊から復員した時乗って、平沢の生家に辿りついた時の軍馬の名前である。

私は兄より一足早く九月一日に平沢に帰っていた。真夜中兄は階級章を外した軍服を毛布で覆い、仙台より暗い夜道をはせる心を押さえ、目立たない裏道を選んで帰って来たのだろう。その時の情景が今でもありありと思いださせられる。

桜正は乗馬で、田舎ではお目にかかれない立派な体躯をした、気品のある、おとなしい馬だった。それから私が、仙台の学校に入る二十三年四月までの約二年七ヶ月と、就職後ときどき生家に帰った時、桜正に乗り又農作業を手伝いするのが楽しみだった。

立派な鞍と革の長靴（ちょうか）もある、長靴にはかがとのところに歯車が付いている。それで馬の腹を軽く蹴る。その蹴り方で走らせたり軽く歩かせたり、止らせたり、手綱と共に馬を自在に操縦するのである。

私は、終戦の次の年、昭和二十一年と二十二年は生家で農作業を手伝っていた。いわゆる居候である。

夏は桜正に跨り、殆ど毎朝四方峠に草刈に行く。朝三時頃出かけ、八時頃馬にいったい草を背負わせ帰り、それから朝飯である。今は何処に行っても草ぼうぼうであるが、あの頃はどの家も朝草刈に行く。草は少なく、馬一だん（六把）刈るのは大変だった。朝寝坊した時は、エドヅリの田圃に行くが、どこに行っても少ない。草丈は長くて十五センチ位だ。やっと二把を二、三時間で刈り背負って帰る。

休み日や暇な日には、桜正に立派な鞍をつけ、長靴を履き乗馬の練習するのが楽しみだった。今は道という道は舗装道路であるから、馬を走らす事は出来ないだろう。あの時代、舗装道路は全くない。田舎道を縦横無人に走り回った。今の時代に乗馬の練習する所と云えば限られている。お金持ちのインテリや競馬場の騎手ぐらいだろう。

大洋漁業の漁船に通信士として乗船して約三年目後に、家庭を持てる自信もつき、収入も増えたので、父の目になつた矢附、平間与三郎三女「なか」と婚約し、結婚式は私が長く休みになつた時行ふ事にした。次の年の三月に結婚するまでの約八ヶ月の間に、短い休みが二回あった。そこで会いに行くとき、平沢の生家から桜正に乗つて、途中一・五キロ位づつ、二回に分けて全速で走らす。北境あたりと銚附神社付近だったと思う。疾風のように走ってくれた桜正を思い出す。

母の実家は菅生であるが、お彼岸やお盆にはよく桜正に乗って行った。約二時間かかったのだろう。おとなしい馬だったから、乗れたのだろう。兄に「ヨツコラシヨ」と乗せてもらい、出掛けた姿が目には浮かぶ。二回目からは桜正も心得ていて、途中間違えずに乗っていれば、何もしなくても到着する、利口な馬だった。

天春は、桜正がくる二年前、軍馬としては無理な歳になつたので国から払い下げになつた軍馬で、大砲や荷車を牽いていた足の太い堂々たる体躯の馬だった。この馬もおとなしく利口で、荷車を牽かせれば、曲がりかどは大きく曲がり荷車をぜったい道から外さない。よく訓練したものだと感心させられた。あれから五十年感慨無量にこのごろの様に思いだされる。